広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第51号　2002　327－335

夏目漱石『それから』と李光洙『再生』

―文明開化を中心として―

李　美正

(2002年9月30日受理)

Comparative Study on "SOREKARA" of Natsume Souseki and "JAE-SAENG" of Lee Kwang-Su
— Focusing on 'Civilization' —

Lee Mi-Jung

There are lots of comparative studies of Natsume Souseki and Luxun in Japan. At the same time in Korea, comparative studies of Lee Kwang-Su and Luxun are made frequently. But it's difficult to find a comparative study of Natsume Souseki and Lee Kwang-Su in Korea or Japan. In spite of the differences in modernization progress in their countries, being Japan, Korea and China, respectively, Natsume Souseki, Lee Kwang-Su and Luxun, have many common features at that time. They are all representative writers who were afflicted in their modern ages. For that reason, a comparative study between Natsume Souseki and Lee Kwang-Su is essential. Therefore this study pays attention to the progress of 'civilization' in the two countries, Japan and Korea, through "SOREKARA" (a sequel of "SANSHIROU") by Natsume Souseki, and "JAE-SAENG" (a sequel of "MU-JEONG") by Lee Kwang-su.

Key words: Natsume Souseki, Lee Kwang-Su, "SOREKARA", "JAE-SAENG", 'Civilization'
キーワード：夏目漱石，李光洙，『それから』，『再生』，「文明開化」

1．はじめに

日本での夏目漱石（1867～1916：以下，漱石と略する）と魯迅（1881～1936）の多数の比較研究や韓国での李光洙（1892～？：雅号は春園，以下，春園と称する）と魯迅の多数の比較研究に比して，漱石と春園の比較研究が殆んどなされていないということは疑問である。西洋文明の刺激によって始まった日本・韓国・中国の近代化の様式には大きな差異があるにも関わらず，近代化を巡る漱石と魯迅，春園と魯迅の比較が盛んに行われているということは，三人とも近代化の中で苦労した知識人かつ各国を代表する近代作家であるという共通分母を持っているからであろう。こうした三国での三人の作家的位置を考えてみると漱石と春園の比較も充分研究するに価するのではないかと思われる。

早稲田大学哲学科の出身である春園は日本留学を通して日本の近代文学に接し，「近代」という新概念を受け入れた。しかし日本で「近代」を学んだものの，彼は漱石とは違う立場－例えば漱石は植民地支配国の一員であり，春園は植民地の一員であるという正反対の状況－に置かれていたので漱石とは異なる色彩の作品を描いていくというのは想像できる。漱石の『三四郎』と春園の『無情』の比較研究は今年11月9日開催の日本比較文学会関西支部大会で発表する予定であるので，今回は二人の多くの作品の中でも『三四郎』を継ぐ『それから』と『無情』を継ぐ『再生』という新聞連載小説を通して，二人における永遠な主題であった近代化，特に文明開化がどのように描写されているかを考察してみたいと思う。

2．『三四郎』と『無情』の続編としての『それから』と『再生』

漱石の『三四郎』は明治41年（1908）9月1日から

12月29日まで，全117回にわたって，東京・大阪の両「朝日新聞」に連載された作品である。『三四郎』の予告文[1]を通して見ると『三四郎』は彷徨する青年三四郎の目を通して日本の近代化を描いているということが分かる。そして漱石はその続編として『それから』を執筆するが，『それから』が『三四郎』の続編であるということは『それから』の予告文を通してみることができる。

> 色々な意味に於てそれからである。「三四郎」には大学生の事を描たが，此小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。「三四郎」の主人公はあの通り単純であるが，此主人公はそれから後の男であるから此点に於ても，それからである。此主人公は最後に，妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いてない。此意味に於ても亦それからである。[2]

『それから』は明治42年（1909）6月27日から10月14日まで，全110回にわたって，東京・大阪の両「朝日新聞」に連載された作品である。その内容は日本近代国家に抵抗する主人公代助を通して日露戦争後の無能無力な日本の社会と個人の生活苦を露に表わしているものである。

一方，春園の『無情』は1917年1月1日から6月4日まで，全126回にわたって，朝鮮総督府の機関誌である「毎日申報」に連載されたものである。春園の「多難の半生の道程」(1936)[3]によると『無情』は伝統と近代との中で動揺する李亨植の目を通して韓国の近代化を描いた作品であることが分かる。そして春園はその続編とも言える『再生』を執筆するが，『再生』が『無情』の続編として書かれたということは春園自身が直接的に述べてはいないが，次のような金允植の言説を通してみると明白である。

> 『無情』でも春園は，裸になった朝鮮の国土と朝鮮の運命を担ったと言われる若い男女を描こうとした。ただ『無情』と『再生』の相違点を取り上げると，『無情』は三・一運動を三年後に控えた「1917年前後の朝鮮男女を描こう」としたものであるのに対して『再生』は三・一運動が過ぎた三年後の「朝鮮男女を描こう」としている点である。〈中略〉春園は『再生』で三・一運動後の韓国社会がいかに堕落したのかを露にしようとしたのである。正確に言うと三・一運動に参加した韓国の若者達の敗北した姿を書こうとしたのである。それで『再生』はある意味では『無情』の続編である。[4]

『再生』は1924年11月9日から1925年7月28日まで，全218回にわたって，「東亜日報」に連載された作品である。その内容は主人公鳳求を通して三・一独立運動後の堕落していく社会と利己的個人主義の澎湃に対して批判していると言える。

3．『それから』における文明開化

1）日本の文明開化への批判

『それから』は日清戦争（1894～1895年）・日露戦争（1904～1905年）を経て日本が帝国主義的な近代国家を目指して行く明治末期を背景としつつ，大学を卒業した当時の知識人である代助を通して日本の近代文明の矛盾を指摘している。

主人公代助はエリートであるにも関わらず，働かないまま父からの仕送りを以て生きて行く高等遊民である。このような代助に「何故働かない」と親友の平岡は非難するが，これに対して代助は自分の働かない理由を次のように打明けている。

> 「何故働かないつて，そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の中が悪いのだ。もつと，大袈裟に云ふと，日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。第一，日本程借金を拵らへて，貧乏震ひをしてゐる国はありやしない。此借金が君，何時になつたら返せると思ふか。そりや外債位は返せるだらう。けれども，それ許りが借金ぢやありやしない。日本は西洋から借金でもしなければ，到底立ち行かない国だ。それでゐて，一等国を以て任じてゐる。さうして，無理にも一等国の仲間入をしやうとする。だから，あらゆる方面に向つて，奥行を削つて，一等国丈の間口を張つちまつた。なまじい張れるから，なほ悲惨なものだ。牛と競争をする蛙と同じ事で，もう君，腹が裂けるよ。其影響はみんな我々個人の上に反射してゐるから見給へ。斯う西洋の圧迫を受けてゐる国民は，頭に余裕がないから，碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で，さうして目の廻る程こき使はれるから，揃つて神経衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と，自分の今日の，只今の事より外に，何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と，身体の衰弱とは不幸にして伴なつてゐる。のみならず，道徳の敗退も一所に来てゐる。」　（六の七）

日本は外圧に抵抗しつつも西洋列強に列するため無理に近代化を遂行し，また無理に帝国主義的な膨張を指向した。このような強行は軍事力と財閥のみが肥大していく不均衡な発達を助長するようになり，各個人にもその余波が及んで民衆の生活力と精神の培養なんかはなくなってしまった。この中で精神的にも物質的にも余裕のない生活をするようになった民衆は自分自身だけを考える私利私欲に没入するようになり，これによって道徳の頽廃は自然に発生するようになる。これを漱石は鋭く指摘しているのである。元来近代という概念は個人を自由に解放することにその目的があるにもかかわらず，むしろ帝国主義化したため自由になるべき個人が国家に抑圧されるようになった。つまり個人より国家が優先視され，その中での個人の個性・自由などは無惨に抹殺される。それゆえ日本社会には倫理観や道徳観などは喪失されてしまい，むしろ競争社会の中で自分の利己的な物欲のみを充足させようとする雰囲気が造成されたと代助は論じる。

代助は人類の一人として，互を腹の中で侮辱する事なしには，互に接触を敢てし得ぬ，現代の社会を，二十世紀の堕落と呼んでゐた。さうして，これを，近来急に膨張した生活慾の高圧力が道義慾の崩壊を促がしたものと解釈してゐた。又これを此等新旧両慾の衝突と見做してゐた。最後に，此生活慾の目醒しい発展を，欧州から押し寄せた海嘯と心得てゐた。（九の一）

日本の伝統と西洋の近代文明の衝突の中で日本が急速な近代化を達成しようとしたため，「道義慾」より「生活慾」が優勢するようになった。すなわち近代以前の日本は倫理を一層重要視して来たが，近代化の波によって西洋のような資本主義社会への再編成を行った結果，道徳よりは物質文明の方が価値があるようになった。代助はこのような日本社会を堕落したと批判し，この日本社会を反映している人間像として父を挙げている。父はこのような日本の内幕は知らないまま，働かない代助を誡める。

「さう人間は自分丈を考へるべきではない。世の中もある。国家もある。少しは人の為に何かしなくつては心持のわるいものだ。御前だつて，さう，ぶらぶらしてゐて心持の好い筈はなからう。そりや，下等社会の無教育のものなら格別だが，最高の教育を受けたものが，決して遊んで居て面白い理由がない。学んだものは，実地に応用して始めて趣味が出るものだからな」（三の三）

「月々御前の生計位どうでもしてやる。だから奮発して何か為るが好い。国民の義務としてするが好い。もう三十だらう」（三の三）

「三十になつて遊民として，のらくらしてゐるのは，如何にも不体裁だな」（三の三）

代助は父が自分の高等遊民の生活を国家などと関連付けて窘めるのに対して，かえって「御父さんの国家社会の為に尽すには驚ろいた」（三の五）と父を揶揄する。そして代助は殺人経験や参戦などを自慢しながら自分に聞かせる「儒教の感化を受けた」父がもっとも近代的な実業をしていることに矛盾を感じる。その上父は事業の不景気を漕ぎ抜けるため，「多額納税者」である「佐川の娘」との結婚を代助に勧める。要するにこれこそ生活欲に道義欲が負けた証拠になるだろう。代助はこのように自分の利益のために息子を政略結婚させようとする父を「実際に於て年々此生活慾の為に腐蝕されつつ今日に至つた」（九の一）と鋭く非難する。

親友平岡も父のように代助が働かないことについて誹謗する一人である。関西での銀行員を辞職した後，東京へ引越して来た平岡は代助を働かないと非難する。

「君は金に不自由しないから不可ない。生活に困らないから，働らく気にならないんだ。要するに坊ちやんだから，品の好い様なこと許かり云つてゐて，－」（六の八）

しかし代助は自分の働かない理由を日本国家の急速な文明開化にその責任を託し，自分は「働らくのも可いが，働らくなら，生活以上の働でなくつちや名誉にならない。あらゆる神聖な労力は，みんな麺麭を離れてゐる」（六の八）と弁論し，「食ふ為めの職業は，誠実にや出来悪い」（六の八）と語る。平岡はこのような代助を「意志を発展させる事の出来ない男」であり，「頭の中の世界」と「頭の外の世界」が一致できず，分離されていると言う。その通り代助は非現実的世界と現実的世界を合一させられない人間である。人間が守るべき倫理を踏みにじってでも，国家主義的な方向かつ帝国主義的な方向にまっしぐらに進んで行く日本近代国家に馴染めない代助はこのような現実が自分には非現実的に認識された。しかし代助が非現実的な世界であると思う世界に歩調を合わせて適応していく平岡は代助の現実的な世界（＝「頭の中の世界」）が逆に非現実的な世界のように考えられた。すなわち平岡が否定する代助の「頭の中の世界」は平岡からみると非現実的な世界かも知れないが，代助にはその方が現

実＝「自然」に近いものであっただろう。このような代助の視線を通して平岡をみると，日本近代社会に溶け合っている平岡は日本近代化によって汚染された近代の弊害であっただろう。

結局日本近代化の影響の下で生きている人間は連帯感を失ったまま孤立して行く。故に人のために泣けた代助も次のように泣けなくなる。

> 現代の社会は孤立した人間の集合体に過なかつた。大地は自然に続いてゐるけれども，其上に家を建てたら，忽ち切れ切れになつて仕舞つた。家の中にゐる人間も亦切れ切れになつて仕舞つた。文明は我等をして孤立せしむるものだと，代助は解釈した。代助と接近してゐた時分の平岡は，人に泣いて貰ふ事を喜こぶ人であつた。今でも左様かも知れない。が，些ともそんな顔をしないから，解らない。否，力めて，人の同情を斥ける様に振舞つてゐる。孤立しても世は渡つて見せるといふ我慢か，又は是が現代社会に本来の面目だと云ふ悟りか，何方かに帰着する。平岡に接近してゐた時分の代助は，人の為に泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云ふのではなかつた。事実は寧ろ之を逆にして，泣かないから現代的だと言ひたかつた。泰西の文明の圧迫を受けて，其重荷の下に唸る，劇烈な生存競争場裏に立つ人で，真によく人の為に泣き得るものに，代助は未だ曾て出逢はなかつた。代助は今の平岡に対して，隔離の感よりも寧ろ嫌悪の念を催ふした。　（八の六）

以前の代助は人のために泣ける人間であったが，今は文明開化の流れの中で泣けなくなった。このような現象はまさにこの時代を生きていく孤立した知識人をよく描いている部分であると思う。すなわち人間なら倫理観と道徳観によって御互いに連帯できる信頼の絆があるべきであるが，明治時代はそのような連帯意識が物質的な文明開化だけを成し遂げていく中で抹殺されてしまった。

> 現代の日本に特有なる一種の不安に襲はれ出した。其不安は人と人との間に信仰がない原因から起る野蛮程度の現象であつた。彼は此心的現象のために甚しき動揺を感じた。〈中略〉然し今の日本は，神にも人にも信仰のない国柄であるといふ事を発見した。さうして，彼は之を一に日本の経済事情に帰着せしめた。　（十の一）

日本が本来持っていた伝統に根ざした状態から出発して，個人の意識や生活に基礎を置きつつ近代化されなければならないにも拘らず，日本はその伝統を無視したまま西洋の形式だけを模倣し，無理な近代化を押し進めて来た。従って伝統的な倫理観は崩壊し，それに変る新しい共通の理念を形成できなかった。従って人間同士の信頼は無くなり，人間は不安を感じるようになる。代助はこのような現象を日本の経済事情＝日本国家の近代化のためであると論じる。代助は個人を考慮しないこのような日本社会に抵抗する。

2）日本の近代国家に抵抗する代助

三年前に大学を卒業した代助はもう三十才になっているにもかかわらず職業を持たないまま「一日本を読んだり，音楽を聞きに行つたりして暮して居」（一の二）る男である。親と兄が実業家であるため，「代助は月に一度は必ず本家へ金を貰ひに行」（三の一）き，その御蔭で働かなくても十分に楽な生活ができる高等遊民である。このような生活をしている代助は明治時代の知識人として，国民の個性・自由などを配慮しない日本社会を非難する。そして自分の働かない理由を堕落した日本社会に原因があるからだと述べ，いつも傍観者的な立場に立って日本社会を咎めるのみであった。しかしこのような代助は三千代との関係で悩み続けた挙句，「今迄は父や嫂を相手に，好い加減な間隔を取つて，柔らかに自我を通して来た」（十四の五）が，「今度は愈本性を露はさなければ」（十四の五）ならないと語り，以前の姿勢とは違って国家に対して抵抗することを表明するようになる。

代助は父の勧める「佐川の娘」と自分の愛している三千代との間で「自然の児にならうか，又意志の人にならうか」（十四の一）と悩む。

> 此所で彼は一のヂレンマに達した。彼は自分と三千代との関係を，直線的に自然の命ずる通り発展させるか，又は全然其反対に出て，何も知らぬ昔に返るか。何方かにしなければ生活の意義を失つたものと等しいと考へた。其他のあらゆる中途半端の方法は，偽に始つて，偽に終るより外に道はない。悉く社会的に安全であつて，悉く自己に対して無能無力である。と考へた。彼は三千代と自分の関係を，天意によつて，－彼はそれを天意としか考へ得られなかつた。－醗酵させる事の社会的危険を承知してゐた。天意には叶ふが，人の掟に背く恋は，其恋の主の死によつて，始めて社会から認められるのが常であつた。彼は万一の悲劇を二人の間に描いて，覚えず慄然とした。彼は

又反対に，三千代と永遠の隔離を想像して見た。其時は天意に従ふ代りに，自己の意志に殉する人にならなければ済まなかつた。　（十三の九）

『それから』は「明治四十（一九〇七）年四月に改正された姦通罪に対する批判」[5]のために書かれた物語とも言われる。千種キムラ・スティーブンは「姦通罪は家名や財産を受け継ぐ子供，特に男児が夫の子だという保証をえるために妻の貞操を管理せんとしたもので，したがって処罰の対象も妻と相手の男にかぎるという不平等な法であったからだ。夫の方は他人の妻以外なら誰と性関係をもってもよく，実際明治期には妾をもつのが男の甲斐性といわれていた」[6]という。当時の姦通罪というのは既婚の女性だけに不利に適用されているので代助はそれへの抵抗として人妻である三千代との愛を選んだということであろう。そして代助は自分のこのような行動に対して「僕は是で社会的に罪を犯したも同じ事です。然し僕はさう生れて来た人間なのだから，罪を犯す方が，僕には自然」（十四の十）であると言う。人の掟には齟齬をきたしたかもしれないが，代助にとってはこの方が一層自然な行動であった。姦通罪というのはどうせ近代国家の秩序の中で定められた近代的産物であり，女の人を差別した不合理的な刑法であったからであろう。これに対して代助は果敢に人妻との愛を選んで，それへの抵抗を見せているのであろう。「社会の習慣に対しては，徳義的な態度を取ることが出来な」（十四の八）い代助は日本社会に対して抵抗することを覚悟しながら，家族である父と兄さえも自分の「敵」であるといい，絶縁する。

個人の自由と情実を豪も斟酌して呉れない器械の様な社会があつた。代助には此社会が今全然暗黒に見えた。代助は凡てと戦ふ覚悟をした。（十五の一）

代助は明治時代の知識人として，日本が西洋と肩を並べるため無理に近代化・帝国主義化していくのを痛烈に批判する。そしてこの日本社会に囚われまいとして高等遊民としての生き方を貫徹してきた。が，代助は日本近代国家に対する自分の姿勢が緩やかであったと気付き，以前より一層積極的な方法を以て，国家に抗っていこうとする。つまり姦通罪を犯して家族とは縁を切り，国家とは「戦う」ことを決心するのである。

4．『再生』における文明開化

1）朝鮮の黄金万能主義社会への批判

朝鮮は1910年日韓併合によって植民地にされ，1919年の3月1日には独立運動が起こる。「三・一運動は，知識人を先頭に農民層を中枢勢力にして，民族資本家と労働者階層を始めとする社会の各界各層が参加した挙族的民族独立運動」[7]であったが，日本の武力弾圧によって失敗に終わった。『再生』はこのような時代を背景としている。

男主人公の申鳳求（シン・ボング）と女主人公の金淳英（キム・スンヨン）は当時学生として三・一運動の中で知り合い，愛し合うようになったが，独立運動の失敗後二人とも投獄され，当分会えなくなる。のちに淳英は鳳求より先に出獄してW女学校に再び復学するが，鳳求は監獄で淳英との再会をひたすら待つ。一年後，鳳求も出獄するが，朝鮮社会はすでに独立運動の当時とは全く異なる堕落した社会に変っていた。（以下『再生』からの引用は執筆者の訳文である。）

三・一運動当時の時代精神の影響で彼らは殆んど皆が愛国者だった。万歳の最中には潜り回りながら国旗も作り，内々通信もし，内々出版もして，警察署の留置場に行き，其の中で何人かは懲役まで受けて出た。〈中略〉しかし万歳の熱が冷えていくうちに一人ずつ二人ずつ皆が三日坊主になってしまってだんだん自分の身体の安楽だけを求めるようになった。〈中略〉「恋愛と金」これが彼らの精神を支配する宗教だ。しかしこれは女だけではない。彼女の兄達も彼女達と同然になった。日が行き月が行くほどに若者達の心が緩んでみんな利己的個人主義者になってしまった。〈中略〉これがため，朝鮮の息子と娘は日に日に朝鮮を忘れてしまい，もっぱら金と快楽ばかりを求める者になった。教壇でチョークを持つ教師も，新聞雑誌に文を書く人も皆金と快楽だけを追う利己的個人主義者になってしまった。　(p.174)

独立運動の当時は植民地からの解放を目標としてみんなが国を取り戻そうとする一念で団結してきたが，日帝の弾圧による独立運動の失敗後は絶望感と虚無感に陥るようになる。そして日帝の殖民地政策が一層厳しくなるにつれて，自分さえも生き残りにくくなった各個人は国の問題等を考える余裕がなくなる。従って各個人は次第に自分の利益ばかりを考えるようになり，結局朝鮮社会は個人の快楽と安楽だけを重視する腐敗した社会に変ってしまう。このような風潮の蔓延する朝鮮は作品の中で痛烈に批判されている。

朝鮮の文明開化は殖民地になってから殆んど日本によってなされるようになったが，この文明開化の波と共に寄ってきた資本主義は次第にお金さえあればいい

という黄金万能主義を生み出す。このような黄金万能主義は遂に自分の出世や利益だけを追求していく薄情な社会をもたらす。言い換えれば近代文明の象徴である資本主義が発展しすぎて朝鮮社会に弊害を生み出したと言えるだろう。このように崩壊していく社会は各個人をして国家に背を向けるようにしたと指摘されている。

一国の独立より一個人の快楽を優先視する流れは，三・一運動の当時，先頭で独立運動を導いた知識人の女子学生にも広がっていった。

> 独立運動が終わり，人々の心が全部冷めて国家と国民のため人生をなげうつという考えが少なくなり，人々が皆自分だけが楽に生きて行けばいいという風潮が広がってW女子学校の寄宿舎にも吹き込んで来た。　(p.53)

国難の際，先頭に立って国を守ろうとした知識人にも国の自主独立より自分の利益を大事にする雰囲気が漂うようになるが，これは淳英にも例外ではなかった。淳英は自分の欲望より国の解放のために力を尽してきた愛国者であったが，各個人が三・一運動の失敗と同時に国より自分の快楽に目を向けるようになる社会風潮の中で少しずつ変っていく。

淳英は二番目の兄のスンギの策略によって金持ちであるペク・ユンヒと会うようになるが，その出会いの裏面には淳英を妾としてユンヒに売ろうとする兄の陰謀が込められていた。しかしそれも知らないまま兄に連れられてユンヒの家へ遊びに行った淳英は，その事実を後で気付き，兄を恨む。兄は自分の事業資金を求めるため妹を金持ちに売ろうとする利己的な個人主義として描写されている。このような兄は淳英にユンヒの妾になることを勧める時も，妻ではないが金持ちの妾になることであるからそれほどいい条件はないと淳英を口説く。すなわち兄はお金が一番であるという近代の資本主義の病弊をありありと見せている人物である。淳英はこのような兄を恨むには恨むが，一方素晴らしいユンヒの邸宅を見て迷うようになる。このこと自体が淳英の変化していく姿を表わしているといえよう。このように変化しつつある淳英は鳳求とユンヒとの間で葛藤するようになるが，これを見て金持ち（弁護士）の妾になったミョン・ソンジュは妾として豊かに人生を楽しむ方がいいと語る。

> 「お金が一番だよ……愛人は夫に内緒で会えばいいじゃん。それがもっと楽しいよ。」と言ったミョン・ソンジュの話はその場では淳英もからかったが，淳英の一生を支配した。　(p.164)

ソンジュの話はお金が最高であるという当時の物質万能主義の傾向をよく描いていると言えよう。三・一運動の失敗による喪失感と植民地下でさらに抑圧される各個人は国とか人よりは自分がどう生きていくべきであろうかを考えなければならなかった。その結果，自分の利得だけを求めるようになり，世の中は乱れてしまった。結局この雰囲気の中で淳英も変って「お金と肉体の快楽がとても嬉し」(p.67) く感じられるようになった。このように完全に変化した淳英の姿は近代化が生み出した副作用の一つであると言えよう。

鳳求は自分が誰よりも信じていた淳英が変ったことも，朝鮮社会が変ったことも全部お金を優先視する黄金万能主義の風潮のためであると指摘するが，これは朝鮮の間違った近代化－文明開化－への批判であろう。

> （ところでなぜ人生は辛いのか。なぜ監獄があり，戦争があり，殺人があり，悪口があり，憎しみがあるのか。）（お金のせいだ。お金のせい。）と鳳求は顔をさっと上げた。お金のせいで人の魂は腐った。愛がある所に憎しみがあり，睦まじい所に争闘があり，惜しみ合い，助け合う所に傷つけ合い，妨害し合うようになって，遂に楽しみの小山のようになるべき世の中が血を流す地獄になってしまった。　(p.155)

鳳求はこのような紊乱な朝鮮はお金が最高という歪んだ近代化によってもたらされ，またこの風潮が国を亡びさせていると言う。要するに朝鮮の民衆は独立運動の失敗とともに日本の植民地下であらゆる物事を強奪されて生きにくくなった結果，自分一人でも快楽的に住めばいいという社会風潮の中でお金を国より道徳より優先視するようになった。このように崩壊した朝鮮社会を主人公鳳求は強く批判している。

2）鳳求の回帰と淳英の死

鳳求は「世の中が皆黄金万能主義に変ったと言っても淳英さんは決してそうにはならないと信じ」(p.67) ていたが，淳英が自分を裏切って金持ちの妾になったのを知って淳英への復讐を決心する。鳳求はまず復讐するためには自分も金持ちにならなければならないと思い，仁川の取引所の仲介商人の店員として就職する。出獄後鳳求は世の中が以前と違って変ったと嘆く人であったが，今はその社会に適応していく鳳求自身も変りつつあった。このように少しずつ変っていく鳳求は職場の社長の息子であるキム・ギョンフンによってな

された殺人事件に巻き込まれて逮捕される。ギョンフンが親のお金を貪って父親を殺したが，その代わりに鳳求が濡れ衣を着るようになる。先妻の息子であるギョンフンは社会主義の活動のため活動資金が必要であって父親に頼んだが，ギョンフンを不真面目だと思っている父はそう簡単にはお金を出してくれなかった。さらにギョンフンは妹の金瓊珠（キム・ギョンジュ）が鳳求を慕っているのを知り，もし瓊珠が父親に信頼されている鳳求と結婚したら父親の財産が瓊珠と鳳求によって管理されてしまうと予想して鳳求を警戒していた。ギョンフンの代わりに逮捕された鳳求は自分が国に背を向けて利己的な生き方を貫き通したため罰があたったと思い，死刑を素直に受け入れる。しかし鳳求を今も慕っている淳英は彼を助けようとベストを尽す。淳英はユンヒの妾になる前，鳳求と旅行に行ったことがあるが，それによって鳳求の子供を生むようになる。それ故淳英は鳳求を忘れようとしても決して忘れることができず，悩まされる。淳英は自分の快楽のため金持ちの方を選択したが，そのためにむしろ試練が絶えなかった。このような淳英は事件の当日，折りしも鳳求に謝罪するため鳳求と会っていた。これで鳳求のアリバイが成立することになるので，淳英はそれを証拠として自ら証人になろうとする。淳英が鳳求の証人になると，主人のユンヒに自分が昔の恋人の鳳求に会ったのが発覚され，淳英は困難な状況に陥るようになるのだが，淳英はそれを押し切って法廷で証言するようになる。鳳求は自分のため尽力する淳英を見て感激する。

> （彼女達は自分のためではない。－少しも毛頭ほども自分のためにやる気ではない。－私を助けるために彼女らは危険と恥を押し切ろうとしている。）こういうふうに考えた鳳求は自分が利己的だったのを悟るようになり，自分を高く美しく見てきたのが壊れてしまう。 (p.142)

> （二人の女の人は各々自分を犠牲にし，危険と恥を冒して私を助けようとした時に，私は淳英に対しては怨望を抱き，瓊珠には軽蔑を抱き，ただ僕一人の権利と名誉だけのために呆然と座っていた。ああ悪かった。利己的だった。）(pp.142～143)

> なぜ年取った母の悲しがっていることを考えなかったんだろうか。本当に私は利己主義者だった。（私が今日まで愛したこと，悲しかったこと，嬉しかったことは，全部利己主義，汚い動機から出たことだ，法廷で表われたような瓊珠と淳英の動機のように自己犠牲の真の愛から出たことは一つもなかった。） (p.143)

鳳求は淳英が自分を犠牲にして鳳求を助けようとするのに対して，これまでの自分はあまりにも利己的な人生を送ってきたと自責する。さりとて淳英を完全に許したわけではないが，これによって自分を顧みるきっかけになったと言える。このような紆余曲折を経た鳳求は釈放され，今迄の自分を反省してとうとう田舎に行って夜学などをやりながら農民達を助けようとする。すなわち，国のため自分にできることを考えた鳳求はそれが農民のため自分を犠牲にすることであると悟り，世俗化した朝鮮社会を離れて再び国のためベストを尽すことを誓う。

一方，鳳求の証人になったことで鳳求との過去が主人のユンヒに知られた淳英は，鳳求と自分の間の子供を取られたまま，ユンヒとの関係は破綻にいたる。そして淳英は鳳求を思慕してはいるものの，瓊珠が鳳求の傍にいる限り鳳求に受け入れられるわけでもなかった。その時，淳英に以前から関心を持っていた専門学校の教授である金博士という人物がこの機会に乗じて淳英に接近する。彼は淳英に一緒にアメリカへ行くことを誘いつつ，息苦しい朝鮮の現実を次のように語る。

> 朝鮮は嫌です。息ができません，息が……そうじゃないですか。箱に押し込められたようです。人間を考えてくれない。ただ苛み合って妬み，このような国にいては人間が痩せ衰えて死んでしまう。 (p.200)

もちろん金博士は日本の支配下で抑圧される朝鮮社会が住めないほど息苦しいのでそこから脱却しようと思ってこれを口に出しただけであるが，これは植民地下での朝鮮社会の状況をよく反映しているところであると言える。もし妾になっていた頃の淳英であったらこの提言に同義したかも知れないが，今の淳英は「お金に従ったため」(p.169) に「一生を棒に振ってしまった」(p.169) と言うほど，間違った道を歩んでいる自分に気付いているのでそれを拒んでしまう。そののち，淳英は夫のユンヒと別れてはいたが，ユンヒの子供を孕んでいたので子供を生んで二人で生き抜こうとする。しかし淳英は息ができないくらい日本の植民地政策に抑圧されている朝鮮から自由になるためにとうとう死を選ぶ。彼女の死は表面的には現世での挫折・切望からの永遠な逃避の手段として描かれているが，その裏面からは植民地下という暗鬱な現実に対する作家の強い抵抗意識をうかがい知ることが出来るのである。独立運動による投獄，社会現実との妥協，死を通じた社

会現実との絶縁というような彼女をめぐる状況展開は，いずれも植民地下での絶望的で悲惨な社会現実を背景としているためである。自殺直前淳英の語った「母と天堂に行こう」(p.231) での「天堂」は，前述で鳳求が乱れている朝鮮社会を「地獄」であると批判した「地獄」と相反する概念として対比描写されており，示唆するところ大きい。つまり淳英は植民地の朝鮮（＝「地獄」）から自由（＝「天堂」）を求めて死を選んだのではないだろうか。

このように『再生』は国家のために再び独立運動家の道を選ぶ鳳求と日本の植民地政策からの脱却として死を選ぶ淳英を通して，うすれていく民衆の独立精神及び植民地支配に対する抵抗意識を鼓吹させようとする作者の意図が込められている作品であると思われる。

5．『それから』と『再生』の比較

まず，『それから』と『再生』に表われている職業に対する見解を比較してみると次のようである。

『それから』では代助と平岡の対話でも分かるように，「食ふ為めの職業」（六の八），つまりお金を稼ぐための職業は個性の発揮ができないので真正な仕事ではないと否定される。この点では『再生』でも同じであるが，ひたすらお金を稼ぐために行われる仕事は非難される。その理由は自分だけが豊かになればいいという風潮は国家のためにはならないからであろう。すなわち金持ちになろうとするのは国家の独立より自分の栄華のために行われる行動であるからである。これに反して『それから』では個人の個性の発揮との関連性によって「食ふ為めの職業」が否定されている。このような相違点はまた国家に対する考え方にも反映されている。

『それから』での代助は高等遊民として生きていくが，その理由として日本社会が自分を働けないようにしたという。つまり日本が無理な文明開化を強行していくので自分は働けないと述べ，そうした国家をつよく批判している。しかし『再生』では『それから』とは違う様相を呈する。鳳求は個人が三・一運動の当時のように誠実に国家の独立のために戦おうとしないから国が独立できないと語る。つまり朝鮮社会が乱れているのは個人の紊乱な利己的な風潮によると述べ，個人の利己的な思考方式が国の独立を阻害しているという。

また，『それから』では妾と姦通という素材を通して国家に抵抗する代助の姿がうかがえる。これは高等遊民のような傍観者としての抵抗ではなくて，前向きに国家と戦おうとする代助の決心である。前述したように姦通罪というのは近代の文明開化の一環として成立された刑法である。すなわち財産問題－近代的な秩序－などの整備のため既婚女性に不利に定められた法であり，西洋的な基準によって定められた新しい制度であった。これに対して代助は女性だけに不利に適用されることと，日本的な発想ではなく，西洋の真似に過ぎないということで姦通罪を否定する。このような代助の考え方は姦通の是非を離れて，西洋のような近代的な文明開化を急速に達成しようとする日本国家の政策であるという側面から抵抗していこうとする。それで代助は人妻である三千代との果敢な行動を取るのであろう。そして『それから』には妾の問題が提示されているが，現代の感覚で言うと妾というのはとんでもない慣行のように考えられるかも知れないが，代助はこの妾や芸者などに対してどんな異和感も示していない。なぜならば代助はむしろ妾を否定して一夫一婦制を断行する日本国家に抵抗感を持っているからである。つまり一夫一婦制というのは西洋の結婚観であり，キリスト教の影響であるからである。代助は妾を置くことの是非を離れて，日本国家が西洋の制度に基づいて文明開化するのに対して批判し，抵抗しているのである。

これに比べて『再生』には蓄妾制度や姦通などに対して強い否定を表わしていることが分かる。妾というのはそもそも近代以前の朝鮮では慣行として認められていた。しかし時代が変って近代化とともに無くなるべきである蓄妾制度が露に行われているので，主人公鳳求はそれを批判している。これは妾になった淳英を非難し，愛しながらも彼女を受け入れなかった鳳求の姿勢を通してもうかがえる。このように鳳求が蓄妾制度や操を守らない行動自体などを非難するのは国家の独立のためには個人の快楽が悪影響を及ぼすためである。すなわち個人が自分の幸福のみに執着して国家の存立などには関心がなくなるので，鳳求はその理由から蓄妾制度や姦通などを否定するのである。

6．終わりに

以上，『それから』と『再生』を通して近代化，中でも特に文明開化について比較考察を試みた。

『それから』での主人公代助は近代的な日本国家を批判しつつ傍観者的な高等遊民としての生活を送っていた。だが，代助は傍観者的な態度からもう一歩進んで人妻である三千代との姦通を犯して当時の近代的な文明開化の一環である姦通罪に対して抵抗しようとする。これはまさに，日本の近代国家に対して前向きに戦うことを決心したことであり，帝国的な近代国家に

対して抵抗することを表明したことであると言える。つまり『それから』では日本近代国家の文明開化によって個人より国家が優先されるのに対する批判と同時に抵抗の意思を表わしている作品であると言える。

『再生』での主人公鳳求は出獄後，三・一運動後の紊乱な朝鮮社会つまり黄金万能主義社会を目の前にしつつ，自分を裏切ってユンヒの妾になった淳英を非難する。そして自分も淳英の裏切りに対して復讐を謀るが，殺人事件をきっかけとして金持ちになろうとした自分の利己的な行動を反省し，再び国のために生きていくことを決心する。一方，妾として自分の幸福のみを追求してきた淳英は自殺に至るが，それは息苦しくなった植民地から自由になるための一つの抵抗であったろう。

本論文は『それから』と『再生』を比較研究することにより，『それから』では個人を苦しめる存在として国家が意味付けられているが，『再生』では国家の存立を阻害する要素として堕落した個人が描き出されていることを明らかにした。

【引用文献】

〈テキスト〉

夏目金之助，『それから』（漱石全集　第六巻），岩波書店，1994

李光洙，『再生』（李光洙全集 第二巻），三中堂，1971

〈単行本〉

夏目金之助，「『それから』予告」（漱石全集　第十六巻），岩波書店，1995

千種キムラ・スティーブン，『漱石研究　第十巻』，翰林書房，1998

李光洙，「多難の半生の道程」（李光洙全集　第八巻），三中堂，1971

李光洙，「余の作家的態度」（李光洙全集　第十巻），三中堂，1971

金允植，『李光洙と彼の時代２』，ソル出版社，1999

丘仁煥，『李光洙小説研究』，三英社，1983

梨花女子大学校韓国文化史編纂委員会，『韓国文化史』，成甲書房，1981

【注】

1）田舎の高等学校を卒業して東京の大学に這入つた三四郎が新しい空気に触れる，さうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触して色々に動いて来る，手間は此空気のうちに是等の人間を放す丈である，あとは人間が勝手に泳いで，自ら波瀾が出来るだらうと思ふ，さうかうしてゐるうちに読者も作者も此空気にかぶれて是等の人間を知る様になる事と信ずる，もしかぶれ甲斐のしない空気で，知り栄のしない人間であつたら御互に不運と諦めるより仕方がない，たゞ尋常である，魔訶不思議は書けない。」（夏目金之助，「『三四郎』予告」（漱石全集　第十六巻），岩波書店，1995，p.252）

2）夏目金之助，「『それから』予告」（漱石全集　第十六巻），上掲書，p.285

3）「僕が『無情』を書く時意図にしたのは，その時代の朝鮮青年の理想と悩みを描き，それと共に朝鮮青年の進路に一つの暗示を与えようとしたのである。」（李光洙，「多難の半生の道程」（李光洙全集第八巻），三中堂，1971，p.452）

4）金允植，『李光洙と彼の時代２』，ソル出版社，1999，p.138

5）千種キムラ・スティーブン，「姦通文学としての『それから』」『漱石研究　第十巻』，翰林書房，1998，p.110

6）千種キムラ・スティーブン，「姦通文学としての『それから』」『漱石研究　第十巻』，上掲書，p.111

7）梨花女子大学校韓国文化史編纂委員会編，『韓国文化史』，成甲書房，1981，p.295

（主任指導教官　水島裕雅）